

宿場の町並み

近世の大字福住は宿場町として栄え、街道沿いに連続した商家が町並みを形成しています。敷地割は間口が狭く奥行きが深いものが多く、敷地における建築物の配置は、街道に面して主屋があり奥に離れや土蔵、納屋が配されます。敷地の間口が広い場合は、土蔵や別棟が主屋に並んで建ちます。いずれも敷地周囲を土塀や板塀が取り囲みます。主屋の基本構成は妻入、つし二階建、棧瓦葺であり、平入も少ないながら存在します。外壁は大壁造の白漆喰塗仕上げもしくは灰中塗仕上げで、側壁に羽目板張の腰板を持つ例が多く見られます。街道沿いの1階軒下部分に格子を備え、半間ほど下がった位置から2階が立ち上がります。二階はつし二階が多く、切妻面に一文字の庇が設けられ、開口部は虫籠窓となっている例が多く見られます。平面形式は、片側に奥行き方向の土間を通し、座敷部分は奥行方向に3室が2列に並ぶ型が標準的で、土間を京都側（東側）に置き、床の間は篠山城側（西側）に置くといった篠山城を意識したと考えられる間取です。屋根形式は、正面側は半切妻造ないし入母屋造で、下屋が付き、背面側は切妻造となる例が多く見られ、小屋構造は、和小屋に登梁を併用した変化に富んだ構造をとります。規模は妻入で二列六間取の標準的な平面形式の場合は、間口が五間半～六間、奥行が六間～七間半で、規模においてそれほど顕著な差は認められず、間口が極端に狭いものは少なく、篠山城下町と比べると間口規模が大きい点に特徴があります。



農村集落の町並み

住吉神社から東側、大字川原、安口、西野々では、街道沿いに連続した農家が町並みを形成しています。建造物は大字福住ほど密に建て揃ってはなく、かつ街道から1m以上後退して主屋を配置し、中門付きの前庭を設けるなど、落ち着いた街道景観を形成しています。また、主屋に隣接して妻入、2階建ての農作業小屋を建てる家が多く、町並みの特徴となっています。主屋の基本構成は、妻入、つし二階建、棧瓦葺、もしくは妻入、平屋、茅葺（鉄板葺）であり、平入も少ないながら存在します。棧瓦葺の主屋は、外壁が大壁造の白漆喰塗仕上げもしくは灰中塗仕上げで、側壁に羽目板張の腰板を持つ例が多く見られ、街道沿いの1階軒下部分に格子を備え、半間ほど下がった位置から2階が立ち上がります。二階はつし二階が多く、切妻面に一文字の庇が設けられ、開口部は虫籠窓となっている例が多く見られます。屋根形式は、正面側は半切妻造ないし入母屋造で、下屋が付き、背面側は切妻造となる例が多い。茅葺の主屋は、入母屋造、外壁が真壁造で腰壁を羽目板張とし、表構えには格子が入り、四方に棧瓦葺の下屋が付く例が多い。規模は妻入で二列六間取の標準的な平面形式の場合は、間口が四間半～六間半、奥行が五間～八間半のものが見られるが、多くが間口五間～六間、奥行が五間～七間半に収まっている例が多く、規模のそれほど異なる主屋が多い。大きな三角の妻面が街道に沿って連続する農村集落景観は、力強く美しい町並みを形成しています。



福住重要伝統的建造物群保存地区の概要

福住の町並みは、その周囲を緑豊かな丹波の山々に囲まれ、四季折々の表情を見せます。集落の後背地を形成する農地では、丹波篠山黒豆や米などが作られ、山間に田園風景が展開し、集落に平行して流れる初井川などの豊かな自然環境が集落景観の形成に大きな影響を与えています。

周囲の山には、初井城をはじめその支城である安口城、安口西砦など中世の城館が点在し、山麓部の数多くの寺院とともに景観を特徴づけています。

街道沿いには、一里塚や道標、常夜灯籠などの歴史的環境を形成する工作物が点在するほか、初井川の水害対策のための石積みの上に立つ土塀と土蔵の連続が、背後の農地と山並みに調和しています。また、現在においても、住吉神社の水無月祭をはじめとする祭礼行事や、キツネガエリ（フクノカミ）やイノコなどの年中行事も継承されています。

保存地区には、このような遠い過去から継承されてきた自然、歴史、人の営みが脈々と受け継がれ、歴史的な町並みとともに田園景観、地域内に点在する景観の核となる社寺、河川、周辺の山と山麓の集落などが一体となった景観を残しています。さらに、保存地区には宿場町と農村集落の2つの歴史的景観が1つの街道に沿って連続する、全国的にも非常に貴重な町並みが形成されています。

宿場町・農村集落 福住の町並み

◆国選定重要伝統的建造物群保存地区◆



福住保存地区で行われる祭礼



水無月祭り

川原に位置する住吉神社の水無月祭は18世紀後半に造り物を中心とした祭礼から曳山の曳行を伴う祭礼となり、その後、福住村出身の遠山宗九郎満直(文政6年～明治35年)によって各山車ごとに独自の打込囃子がつくられました。

氏子集落から出た5台の山車が宮入をすると、境内で打ち込囃子が競演される。打込衆は楽器一つを習得するのに3年程度の年数を要し、この打込囃子の競演が、住吉神社祭礼の見どころとなっています。

曳山の形状や巡行時の囃子は京都の祇園祭を彷彿させ、打込囃子は大阪の文楽からの影響が想定されるなど、京都、大坂との交通の要衝であった地域の地理的、文化的環境をうかがわせるものです。(毎年7月下旬開催)

交通のご案内



電車で来られる場合

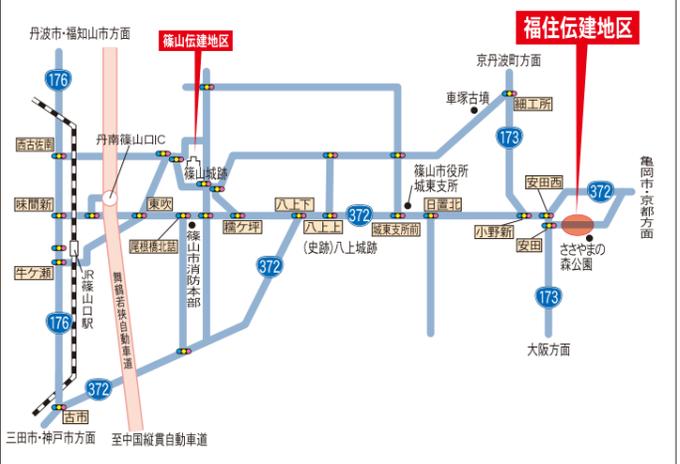
- JR福知山線「篠山口駅」下車→神姫グリーンバス「篠山営業所」行き→終点下車→乗り換え→神姫グリーンバス「福住」行き→終点下車
- JR山陰本線「園部駅」下車→京都交通バス園部線→約30分→「福住」下車

※バスでのアクセスは便数が少ないため、車が便利です。

自動車

来られる場合

- 舞鶴若狭自動車道「丹南篠山IC」(出口を左折)から車で東へ約30分
- 国道173号線と国道372号線の交差点から東へすぐ
- 京都縦貫自動車道「亀岡IC」から車で西へ約40分



保存地区内は生活の場です。見学される方は、マナーを守り、住民への配慮をされるようお願いいたします。

発行：篠山市教育委員会〔電話：079-552-5792〕
〒669-2397 兵庫県篠山市北新町41
<http://www.city.sasayama.hyogo.jp/pc/group/shakaiyoku/city-planning/post-59.html>

福住地区の歴史

福住の町並みは、篠山盆地の東端、篠山川の支流となる初井川が形成した河岸段丘上に位置し、篠山盆地を東西に横切る西京街道（京街道）が盆地を東に抜け、初井川と平行して走るようになるあたりから、街道に沿って町並みが広がります。

古代には丹波国八郷のひとつ真継郷に属しており、現在の小野新周辺に山陰道の駅馬として小野駅が置かれました。さらに、平安・鎌倉時代には丹波国に貴族や大寺社の荘園が多く設けられ、福住は初井庄の一部であったと考えられ、室町時代には福住一帯が仁木氏の支配下にありました。

戦国時代になると、波多野氏が勢力を伸ばし、高城山に築いた八上城を中心とする勢力圏を形成しました。福住は波多野氏の被官であった初井氏の拠点でした。初井氏は中世以来この地域に拠点を置く在地領主であったと考えられ、永正年間には福住の北を流れる初井川を挟んだ対岸の山上に初井城を築くとともに、安口の初井川対岸には安口城、安口西砦といった支城を設けていました。

天正6年(1578)の明智光秀による丹波攻略により、波多野氏を中心とした丹波衆は勢力を失います。慶長13年(1608)に松平康重が八上城に移封され、慶長14年(1609)に篠山盆地の中央に、15カ国20の諸大名によって天下普請で篠山城が築かれました。

丹波国が諸大名の所領として細分化される過程で、福住村・川原村は篠山藩領、安口村・西野々村は亀山藩領へ編入されたため、幕藩体制下では別々の藩領として存在することとなりました。

篠山藩は、篠山城下を中心とする街道整備の中で、西京街道沿いの「福住村」、「迫入村」、摂津・播磨を結ぶ街道沿いの「古市村」をそれぞれ宿駅に指定し、いずれの村も近世を通して宿場町として繁栄します。福住は京、大坂との交通の要衝であり、本陣・脇本陣が置かれ、近世後期には2軒の山田家が本陣・脇本陣を勤めました。またその他にも、篠山藩の御蔵所が置かれ、米蔵・粉蔵やそれらを管理する役人詰所が建てられました。一方、川原村、安口村、西野々村は農村集落として位置づけられますが、安口村には関所が設けられ、福住村が宿場町となったことから農業と兼業で旅館や茶店などを営む家もありました。

明治維新にともない宿駅の制度は廃止されますが、明治時代中期頃までは旅客交通量、貨物輸送量の増加により宿場町として繁栄を続けます。しかし、こうした繁栄も、鉄道・道路網の整備が進むことによりかげりを見せるようになり、とりわけ、明治32年(1899)に京都・園部間を結ぶ京都鉄道(現JR山陰本線)、神崎・福知山間を結ぶ阪鶴鉄道(現JR福知山線)が開通したことにより、福住は大きな打撃を受け、旅客を対象とする旅館や商店は徐々に廃業していきました。その結果、特定の産業を持たない福住は農業を中心とした農村集落としての性格を強めていくこととなりました。また、昭和47年(1972)には福住を経由して篠山・園部間を結ぶ予定であった国鉄篠山線が計画途中で廃線となったことも福住の経済的な発展に影響を与えました。

このように、明治以降、福住は近代化の影響をあまり受けず、そのことが伝統的な町並みを現在まで残す要因となりました。現在、街道沿いの大字福住から大字西野々にかけて、江戸後期から明治期に建てられた妻入民家を中心とした町並みが続いており、江戸期以来宿場町を中心として発展した面影を色濃くとどめています。





福住 (ふくすみ)

近世の福住は宿場町として栄えたため、現在でも街道沿いに妻入民家を主体とした町並みが続きます。農家が旅籠を兼業し、一般の民家に旅客を泊めることもあったようです。19世紀に建てられた民家が多数あり、現在と変わらない景観の宿場町であったと考えられます。



川原 (かわら)

福住の町並みを抜け西京街道を東へ向かうと、住吉神社の社叢と社務所の大きな茅葺(トタン)の屋根が現れます。妻入民家は、福住ほど密に揃っておらず、道路から後退して主屋を配しています。

民家の間に田畑が混在するところもあり、民家の密度の点で福住中心部との違いが明確となっています。



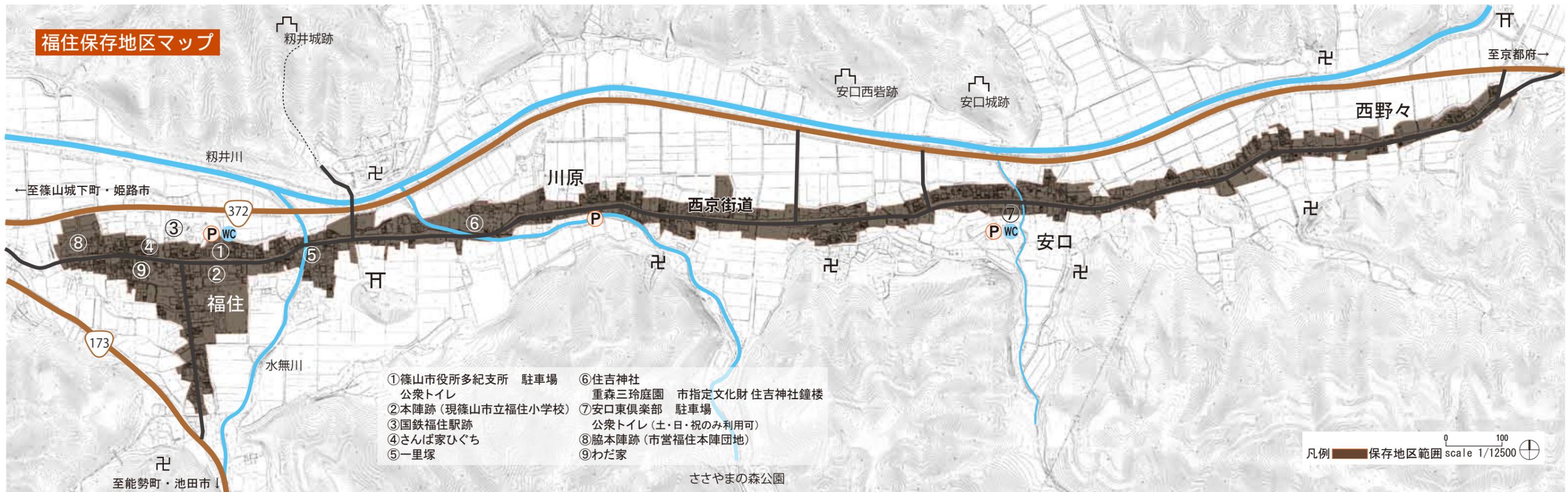
安口 (はだかす)

安口の町並みは、東西にわかれており、西地区は山肌によって街村を形成しており、大火もなかったことから18世紀にまで遡ると考えられる民家が現存します。また、東地区では茅葺民家の現存する割合が他の地区と比べやや高く、街道に面する妻入の三角が近世・近代の雰囲気の色濃く残しています。



西野々 (にしなの)

西野々の町並みは、民家の間に田畑があり1軒ごとの間が空いている例が多く、妻入民家と平入民家が混在する町並となっています。幕末から明治にかけて建てられた民家が10棟近く現存しており、近世から近代にかけての村の雰囲気伝えていています。



伝統的建造物の意匠



茅葺屋根



茅葺屋根(トタン)



切妻妻入



切妻平入



瓦葺棟門



土塀



塀



切妻平入



白漆喰塗壁



虫籠窓



鬼瓦と鳥袂



灰中塗壁



ガラス窓



欄干付窓



海鼠壁



虫籠窓



ガラス窓



荒格子

細格子